

鉄道総研の

技 術

遺 産

File No.24

十河信二のレリーフ

■ 研究所の整備事業と十河信二

国立研究所の本館の玄関ロビーに入ると、右手の壁に「十河信二」と書かれた人物像のレリーフが掲げられています。十河信二は、東海道新幹線の実現を推進した国鉄総裁としてその名が知られていますが、すでに本誌の連載でも紹介したように、国立研究所とも関わりの深い人物でした。

国立研究所の前身である旧国鉄の鉄道技術研究所は、現在の東京都港区浜松町付近の鉄道用地にありましたが、1959(昭和34)年に十河信二総裁のもとで国分寺市へ移転しました。その経緯などについては、本誌の2013年3月号、同4月号などで紹介した通りで、これによって研究所の施設が一新され、研究基盤が強化されることとなりました。

東海道新幹線の実現に果たした十河総裁の役割については、本誌の2012年8月号でも触れましたが、東海道新幹線の実現に向けてより良好な環境と最新の設備で研究開発ができる体制を整えたことは、新幹線のみならずその後の日本の鉄道技術の発展にも大きな意義がありました。



①十河信二のレリーフ



②十河信二出生地の碑(愛媛県新居浜市) 生家の跡地は保育園となり、新居浜市が1974(昭和49)年に建立した記念碑が建っている。

③研究所の移転工事成済の記念植樹と十河総裁 1961(昭和36)年6月に国立集中整備工事が完成し、十河総裁を招いて中庭で記念植樹が行われた。



■ 十河信二のプロフィール

十河信二は、1884(明治17)年、現在の愛媛県新居浜市で生まれ、西条中学校、第一高等学校を経て東京帝国大学法科大学政治学科を1909(明治42)年に卒業しました。ただちに、鉄道院に採用されて書記となり、1920(大正9)年には経理局会計課長となりました。

関東大震災の復興事業を行うため、帝都復興院が創設され、初代総裁に後藤新平(本誌2012年9月号参照)が就任しましたが、十河は書記官(のち経理部長)として鉄道省から出向し、大臣官房研究所から出向した田中豊技師(本誌2012年12月号、2013年8月号

参照)などとともに、震災復興事業にあたりました。

1903(昭和5)年には南満洲鉄道理事となりましたが、1934(昭和9)年に退任して、翌年、関連会社の興中会社の社長となり、1939(昭和14)年には帰国して郷里の愛媛県西条市長などを努めていました。1955(昭和30)年に第4代国鉄総裁に就任し、東海道線増強調査会、日本国有鉄道幹線調査会などの審議を経て広軌別線による高速鉄道の建設を決定し、1959(昭和34)年に東海道新幹線の工事に着手しました。しかし、工事予算が大幅に超過したため、その責任をとって開業を1年

